

『緋文字』と『白鯨』にみられる円環 —コミュニティにおける共生に関連して

倉橋洋子

はじめに

ラルフ・ウォルドー・エマーソン (Ralph Waldo Emerson) が円環に関して、1841年に発表したエッセー、「円」(“Circles”)において円環、特に「同心円」(concentric circles)について論じたことは周知のことである。エマーソンと同時代の作家、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) とハーマン・メルヴィル (Herman Melville) も、それぞれ1850年出版の『緋文字』(*The Scarlet Letter*) や、1851年出版の『白鯨』(*Moby-Dick or the Whale*) において円環のイメージを使用している。

『緋文字』において、ヘスターがヨーロッパとニューイングランドを去来することは円環を形成している。物語の終焉においてヘスターが姦通の結果生まれた娘のパールを連れてヨーロッパへ渡るものの、再び同じピューリタンのコミュニティに戻り、自らの意志で姦通の罰としての緋文字を胸につけることはコミュニティにおける共生とその発展を考える上で興味深い。また、リチャード・ハーター・フォグел (Richard Harter Fogle) 他により、『緋文字』における地獄のイメージが指摘されてきた。チリングワースが復讐に呪縛され、デイズデイルが罪悪感と名誉欲の葛藤に悩む様子は、ダンテ・アリギエーリ (Dante Alighieri) の描いた罪人が罰から逃れられない地獄の円環のイメージと結びつく。そのような彼らのコミュニティとの関係も興味深い。

一方、『白鯨』では、モビー・ディックへの復讐に呪縛されたエイハブの状態も、地獄の円環のイメージと結びつく。エイハブの場合は、海のコミュニティの乗船員を巻き込み、白鯨の追跡に突き進む。一方、サンドラ・バート (Sandra Burt) は『白鯨』の円環のイメージとしてピークオッド号が地球を回ることを挙げている。また、『白鯨』では、エマーソンが自然界と結びつけた同心円を連想させる、

海の渦や鯨の同心円が描かれている。

本稿の目的は、コミュニティにおける共生という観点から、『緋文字』と『白鯨』においてヘスターやエイハブが移動して形成する円環や、登場人物それぞれの呪縛が形成する地獄の円環のイメージ、さらに同心円の意味を比較考察することである。その際、エマーソンの円に関する概念を参照する。

1. 『緋文字』と『白鯨』におけるコミュニティ

1.1 ヘスターとコミュニティ

17世紀ニューイングランドにおける政教一致のピューリタンのコミュニティでは、姦通は公に裁かれる罪であった。『緋文字』においてヘスターは、医師の夫、チリングワース（本名はプリン）より先に単身でヨーロッパからボストンに移住し、姦通の結果、パールを出産する。その罰として、ヘスターは姦通（Adultery）の頭文字、Aの文字を身に付け、赤ん坊のパールとともにコミュニティの広場で「群衆の視線」にさらされる（55）。ヘスターの夫は2年弱行方不明で死亡が推測されたために死刑ではなく、このような罰が下された。しかし、姦通そのものとそれを象徴するヘスター自身が作成した緋文字ゆえに、彼女に対して厳しい者もいる。とりわけ、赤い布に金色の刺繍糸でAの文字を縁取りした派手な緋文字に対して、ヘスターは罰とされたことを自慢していると下記のように受け取る者さえいる。

Why, gossips, what is it but to laugh in the faces of our godly magistrates, and make a pride out of what they, worthy gentlemen, meant for a punishment? (54)

緋文字の刺繍は、ヘスターの情熱の証で罪を悔いて刺繍したものではないことは、7年後に姦通相手の牧師のデイズデイルと森で再会した時に明らかになる。それは、ピューリタンのコミュニティの規律や価値観の及ばない森で解放されたヘスターが、抑圧していた本心、「私たちがしたことはそれ自身神聖でした」と語ることに表れている（195）。ヘスターの「空想の豊かさを示した」緋文字は、植

民地の奢侈禁止令に触れ、ピューリタンのコミュニティが課した罰への一種の挑戦である (53)。

しかし、ヘスターは緋文字に向けられるコミュニティの人々の視線に苦しめられる。

From first to last, in short, Hester Prynne had always this dreadful agony in feeling a human eye upon the token; the spot never grew callous; it seemed, on the contrary, to grow more sensitive with daily torture. (86)

ヘスターにとってコミュニティは直接向き合わねばならない抑圧的な外集団である。

1.2 チリングワースとコミュニティ

行方不明だったチリングワースはネイティブ・アメリカンに捕らわれていたが、身代金と引き換えに解放してもらうためにヘスターが先に到着していたコミュニティに姿を現す。チリングワースはさらし台の上のヘスターを目にするや否や「指を唇の上に置き」、彼女に合図を送る (61)。自分の妻が公衆の面前で「恥 (shame)」をさらしていると悟ったチリングワースがとっさに取ったこの動作には、夫として恥をかきたくないという世間、コミュニティを意識したエゴがみられる (61)。さらに、ヘスターの姦通を「妻を寝取られた夫の恥」と考えるチリングワースは、自分の正体をコミュニティに隠さざるをえない (76)。

またチリングワースは、妻の姦通相手に対する復讐のためにもコミュニティにおいて自分の正体を隠す必要がある。そこでチリングワースは、ヘスターがパールの父親の名前を告白しないことを認める代わりに、自分の正体を秘密にするという取引をする。その取引にヘスターが同意したのは、コミュニティにおけるディムズデイルの牧師としての立場を守り抜くためである。さらに、ヘスターは姦通に関して「私はあなたにとっても悪いことをしました」とチリングワースに述べているように、彼女には負い目がある (74)。一方、家庭願望があったチリングワースは知的才能が年の差を補うと幻想を抱き、旧家の貧しいヘスターと無理に

結婚したことで「互いに対して悪いことをした」と認識している(74)。医師として認められていくものの、ヘスターの夫であることを秘密にしたチリングワースにとってもコミュニティは抑圧的な外集団である。

1.3 ディムズディルとコミュニティ

ディムズディルにとってもコミュニティは抑圧的な外集団である。特に、ディムズディルは社会的地位の高い牧師という職業に就いているために、「社会の規則や主義、偏見にさえも」束縛されてきた(200)。そのようなディムズディルが姦通を犯し、その上パールの父親であることを秘密にしているために罪悪感がつわり、身体も憔悴していく。しかし、下記のように肉体の憔悴と反比例するかのよう、コミュニティにおいてディムズディルの牧師としての名声は上がっていく。彼の評判は、皮肉にも罪悪感を抱えているがゆえに獲得されたものである。

While thus suffering under bodily disease, and gnawed and tortured by some black trouble of the soul, and given over to the machinations of his deadliest enemy, the Reverend Mr. Dimmesdale had achieved a brilliant popularity in his sacred office. He won it, indeed, in great part, by his sorrows. . . . His fame, though still on its upward slope, already overshadowed the soberer reputations of his fellow-clergymen, eminent as several of them were. (141)

その一方でディムズディルには名誉欲があることは否定できない。ディムズディルはこれまでコミュニティを去ることも可能であったが、留まっていたのはそのためでもある。森でヘスターと再会した時、チリングワースがヘスターの夫であったと知ると、ディムズディルはヘスターの立てていた計画に従う。ニューイングランドを去る日が、総督の就任祝賀説教をする日の翌日であると知り、ディムズディルは「これは幸運だ」と喜ぶ(215)。それは、牧師の職業を終えるのにニューイングランドの牧師として名誉な機会であるからだ。ディムズディルのこのような内心は、祝賀日に行進する彼を見たヘスターも察して次のように思う。

She hardly knew him now! He, moving proudly past, enveloped, as it were, in the rich music, with the procession of majestic and venerable fathers; he, so unattainable in his worldly position, and still more so in that far vista of his unsympathizing thoughts, through which she now beheld him !
(239)

T・ウォルター・ハーバート (T. Walter Herbert) も指摘しているように、この時のディムズデイルはコミュニティにおける社会的地位と名誉を享受して、ヘスターとは別世界に住む人のようである (Herbert 206)。ヘスターが秘密を守っているためにコミュニティに受け入れられているディムズデイルは、チリングワースと同様にコミュニティが外集団であることを、この時忘れていたかのようである。

1.4 エイハブとコミュニティ

『白鯨』におけるコミュニティに関しては、ピークオッド号、および他の船の乗船員で構成される海のコミュニティを対象とする。ピークオッド号の乗船員は多種多様な人種と国籍、例えば白人アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、ネイティブ・アメリカン、ポリネシアン人、インド人、マレー人、オランダ人、イタリアン人、中国人他の男性のみで構成されている。乗船員の募集に係ったピークオッド号の共同所有者の一人、ピーレグ船長は第16章「船」(“The Ship”)においてエイハブ船長のことを下記のように、「ご立派な神を恐れませんが、神のような人」であるとイシュメルに言う。

He's a queer man, Captain Ahab – so some think – but a good one. Oh, thou'lt like him well enough; no fear, no fear. He's a grand, ungodly, god-like man, Captain Ahab; doesn't speak much; but, when he does speak, then you may well listen. (79)

加えて、ピーレグ船長はエイハブが若い女性と結婚していて子供もいることから、「人間性」があるとも言う(79)。一方、予言めいたことをイシュメルに語る船乗りのイライジヤは、エイハブ船長が「雷おやじ (Old Thunder)」と呼ばれていると告げる(92)。

そのようなエイハブは、航海中にレイチェル号に遭遇し、船長から息子を救助するように依頼されるが、白鯨のモビィ・ディックが近くにいるという理由で海のコミュニティの人命を無視し、復讐を選択する。エイハブは妻子とともに「人間性」を陸においてきたかのようなのである。このように、エイハブは前の航海でモビィ・ディックに脚を食いちぎられたことに対する復讐に呪縛されている。最終的に、海のコミュニティは多種多様な乗船員から構成されているにもかかわらず、一丸となってエイハブの白鯨への復讐に駆り立てられる。それは船長であるエイハブが恐怖とカリスマ性を備えた「ご立派な神を恐れないが、神のような人」であるからだ。エイハブへの恐怖は「雷おやじ」というニックネームに表れている。

『緋文字』においてヘスター、チリングワース、およびディムズデルにとって、コミュニティはピューリタンの絶対的な規律や価値観を持ち、抑圧的であるが、『白鯨』ではエイハブが独自の絶対的な規律や価値観を持ち、海のコミュニティに対して抑圧的である。

2. 『緋文字』と『白鯨』における地獄の円環のイメージ

2.1 『緋文字』における地獄のイメージ

ダンテの『神曲』(*La Divina Commedia*)は、ホーソーンのみならず、エマソン、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau)、メルヴィル、マーガレット・フルー (Margaret Fuller)、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) などの19世紀アメリカの作家の間で読まれていた。¹『神曲』の『地獄篇』(*Inferno*)では、罪人の罰は終わることなく繰り返される。²『地獄篇』の円環のイメージの意味は、罰による苦しみの繰り返しである。

フォーグルは、地獄の炎のイメージが『緋文字』にあると指摘している (Fogle 143)。ヘスターの緋文字は「地獄の炎」と結びつけられているが(87)、三章で述べるようにヘスターは緋文字の呪縛から解放される。復讐に取り憑かれたチリン

『緋文字』と『白鯨』にみられる円環—コミュニティにおける共生に関連して

グワースも地獄のイメージと結びつけられている。チリングワースは、ヘスターの姦通相手への復讐のためにニューイングランドのコミュニティに留まり、だんだん顔には邪悪さが表れ、それが日増しに増加していく。下記のように、世俗ではチリングワースの実験室の火や燃料は、地獄からもたらされたと噂されている。

According to the vulgar idea, the fire in his laboratory had been brought from the lower regions, and was fed with infernal fuel; and so, as might be expected, his visage was getting sooty with the smoke. (127)

さらに、下記のようにチリングワースの目から輝く光は、ジョン・バニヤン (John Bunyan) の『天路歷程』 (*The Pilgrim's Progress from This World to The Which Is to Come*, 1678) で描かれた地獄に通じる山の中腹の入り口からできたものようである。³

Sometimes, a light glimmered out of the physician's eyes, burning blue and ominous, like the reflection of a furnace, or, let us say, like one of those gleams of ghastly fire that darted from Bunyan's awful door-way in the hill-side, and quivered on the pilgrim's face. (129)

一方、ディムズデルの苦悩も地獄と結びつけられている。彼は、コミュニティにおける牧師としての名誉欲と罪を告白できない罪悪感から生じる葛藤に苦しんでいる。ディムズデルがコミュニティを去ることも罪の告白もしない／できないのは、名誉欲に加え、「臆病 (Cowardice)」のせいでもある (148)。臆病なディムズデルは葛藤から抜け出せない。チリングワースが観察して分析しているディムズデルの心は、下記のように「燃えさかる苦しみ」に溢れており、地獄の炎を連想させる。

This unhappy person [Chillingworth] had effected such a transformation by devoting himself, for seven years, to the constant analysis of a heart

full of torture, and deriving his enjoyment thence, and adding fuel to those fiery tortures which he analyzed and gloated over. (170) []は筆者

チリングワースとディムズデルの状態は、ダンテの『地獄篇』の地獄の円環同様に、それぞれ復讐と、名誉欲と罪悪感に呪縛され、それらから逃れられない地獄の円環のイメージを形成している。

2.2 『白鯨』における地獄のイメージ

ホーソンが1850年に「イーサン・ブランド」(“Ethan Brand”)を出版した時、1851年5月初旬、メルヴィルはホーソン宛ての手紙で、ブランドは「悲しい人だ」と書いている(*Correspondence* 192)。「許されざる罪」の探求に呪縛されたブランドは、探求の旅に出て「許されざる罪」を発見したと思い、出発地点のコミュニティに戻る。ブランドはコミュニティの人々にその発見を認めて欲しかったのである(Kurahashi 7)。メルヴィルが『白鯨』を書いた時、ブランドとチリングワースを意識していたのではないであろうか。『白鯨』の96章「油煮窯」(“The Try-Works”)では、「人間よ、あまり長く炎を見つめてはいけぬ」と語られているが、これは石灰焼き窯の炎を見つめているうちに「許されざる罪」の探求に取り憑かれたブランドへの警告としても通用する(424)。もっとも、エイハブは復讐という点では『緋文字』のチリングワースと似ている。地獄の罪人が罰から解放されないように、復讐から解放されないエイハブにも地獄の円環のイメージがつきまとう。

ところで、メルヴィルは『白鯨』が出版される前の1851年6月29日付けのホーソン宛ての手紙で、『白鯨』について次のように書いたことは周知のことである。

Shall I send you a fin of the *Whale* by way of a specimen mouthful? The tail is not yet cooked -- though the hell-fire in which the whole book is broiled might not unreasonably have cooked it all ere this. This is the book's motto (the secret one), - Ego non baptiso te in nomine - but make out the rest yourself. (*Correspondence* 196)

メルヴィルは『白鯨』について比喩的な表現で、本全体は「地獄の炎」で料理されていると記し、『白鯨』における地獄のイメージを示唆している。さらに、この本の motto をラテン語で書いている。この motto は『白鯨』の 113 章「炉」(“The Forge”) でエイハブが唱えた呪文を短縮したものであり、手紙では残りの部分はホーソーンにゆだねている。『白鯨』で書かれた motto の全文は「父の名においてではなく、悪魔の名において洗礼する (Ego non baptizo te in nomine patris, sed nomine diaboli!)」である (489)。エイハブが自分の剃刀を集めて白鯨用の刀を鍛冶屋のパスに作らせ、乗船員の拝火教徒の血で洗礼を受ける時に唱えたものである。

エイハブのこの時の心境は、この場面の直前にパスに向かって言う次の言葉に表れている。

In no Paradise myself, I am impatient of all misery in others that is not mad. Thou should'st go mad, blacksmith; say, why dost thou not go mad? How can'st thou endure without being mad? Do the heavens yet hate thee, that thou can'st not go mad?—What wert making there? (487)

エイハブはモビィ・ディックへの復讐に取り憑かれているものの、自分は狂っていないために「惨めさ」を感じ、「楽園にはいない」と思っている。さらに、「狂うことができないのは天がまだ憎んでいるからだ」とパスに言う言葉は、自分への言葉でもある。エイハブは「惨めさ」から解放されるために、刀を異教徒の血で洗礼し、自らキリスト教の神と決別するのである。

3. 『緋文字』と『白鯨』における円環とコミュニティ

3.1 ヘスターの円環とコミュニティ

『緋文字』の終焉において、ヘスターはディムズデルとチリングワースが亡くなった後、パールとともにピューリタンのコミュニティを去り、出身地のヨーロッパに戻る。ヘスターのこの移動は円環を形成している。ヘスターはコミュニ

ティから逃亡することも可能であったが、「罪を犯した場所だからこの世の罰を受けるのもこの場所でなければならない」と自分に言い聞かせて留まっていた(80)。また、ヘスターはデイズデイルと現世では結ばれないと認識していたが、彼がコミュニティにいたために留まっていた。そのために、ヘスターには復讐を企てていたチリングワースの動向を見届ける必要があった。デイズデイルが亡くなると、生きる目的を失ったかのようにチリングワースも亡くなり、ヘスターはコミュニティに留まる理由がなくなる。加えて、パールはチリングワースの財産を相続し、新世界で一番の女相続人になるものの、パールを「悪魔の落とし子」とであると主張する者もコミュニティにはまだいる(261)。⁴ヘスターがヨーロッパへ移動して形成する円環の意味は、ピューリタンのコミュニティとの決別である。

しかし、パールが結婚した後、ヘスターはニューイングランドのコミュニティに戻り、螺旋形の円環を形成する。ヘスターがニューイングランドを去る時、コミュニティには既に彼女に対する変化の兆しが見え始めていた。ヘスターは村はずれに住み、一人でパールを育て、針仕事で生計を立てて経済的に自立していた。加えて、ヘスターは病人を看護し、貧しい人々のために服を作り、また、「彼女自身ほどもじめではないが、哀れな人々に対して余った収入を慈悲の心でさずけていた」(83)。また、ヘスターの「繊細で想像力」を伴った手仕事は、花嫁のベールを除き、流行するようになっていた(81)。ヘスターがコミュニティのファッションに影響を与えたことに示されているように、彼女には人々を動かす力がある。ヘスターの行為が評価され、コミュニティに受け入れられるにつれて、緋文字の意味も変化していった。緋文字は「できる(Able)」を意味し、ヘスターには「女性の力があり、強かった」と人々は語るようになっていた(161)。

ヘスターがヨーロッパから再びニューイングランドに戻ったのは、パールが家庭を見つけた見知らぬ土地よりも、そこには「より本当の生活(a more real life)」があるからだ(262)。それは、「悔い改め(penitence)」を伴った生活である(263)。ヘスターは当初、罪を犯した場所で罰を受けなければならないと自分に言い聞かせていたが、帰還した時、心情は変化していた。

ヘスターにとっての「悔い改め」とは、これまで行っていたように困った人々

の相談相手になるなどの社会奉仕を行うことである。その実行により、下記のように緋文字は畏怖と尊敬の念をもって見られるようになる。

But, in the lapse of the toilsome, thoughtful, and self-devoted years that made up Hester's life, the scarlet letter ceased to be a stigma which attracted the world's scorn and bitterness, and became a type of something to be sorrowed over, and looked upon with awe, yet with reverence too. (263)

ヘスターは人々を助ける自立した新しい女性であることを証明し、絶対的な規律と価値観を持った閉鎖的なコミュニティに変化をもたらし、彼女を受け入れるように導き、上昇する螺旋形の円環を形成する。また、ヘスターの行為は、彼女が考えていた女性全体の地位向上にも繋がる。女性の地位に関しては、ヘスターは社会全体の組織が崩れ、男性の性質が根本的に修正されねばならないと思索していた(165)。さらに、女性の「霊妙な性質 (ethereal essence)」が失われても、女性自身が変化しなければならぬとも考えていた(165)。緋文字、A はもはや姦通の罰ではなく、自立した新しい女性を象徴するようになり、ヘスターは緋文字の呪縛から解放される。A の文字はいずれ独立する民主国家、アメリカの A を象徴しているとも言える。結局、ヘスターの螺旋形の円環は、ヘスターやコミュニティの向上、アメリカの発展を意味する。

3.2 『白鯨』における円環とコミュニティ

3.2.1 エマーソンの同心円

『白鯨』における円環について検討するに当たり、エマーソンの同心円についてみていく。エマーソンがエッセー、「円」において下記のように自然界と円を結びつけ、「円は世界の符号の中で最高の表象である」と述べていることは周知のことである。

The eye is the first circle; the horizon which it forms is the second; and

throughout nature this primary figure is repeated without end. It is the highest emblem in the cipher of the world. (301)

さらに、エマーソンは、自然界を「同心円 (concentric circle)」の一組織と考え、「我々が立っている表面は固定していなく、スライディングしている」ことも認識している。

The natural world may be conceived of as a system of concentric circles, and we now and then detect in nature slight dislocations which apprise us that this surface on which we now stand is not fixed, but sliding. (313-14)

また、エマーソンは下記のように、人間の人生は「自己進化の円」であると論ずる。

The life of man is a self-evolving circle, which, from a ring imperceptibly small, rushes on all sides outwards to new and larger circles, and that without end. The extent to which this generation of circles, wheel without wheel, will go, depends on the force or truth of the individual soul. (304)

「自己進化の円」がどの程度広がるかは「個人の魂の力や、真実性」によるものの、際限なく四方に広がる可能性がある。トランセンデンタリスト、エマーソンの自然観は楽観的であるとこれまで多くの批評家に指摘されてきたが、人生の「自己進化の円」の概念も楽観的である。

3.2.2 円環と海のコミュニティ

『白鯨』においてエイハブのピークオッド号での航海は、ブランドの旅と同様に出発点に戻る円環を形成している。モビィ・ディックは「どこにでも姿を現すばかりでなく、不死身」であるがゆえに、エイハブの追求は果てしなく続く(183)。復讐の目的を果たすこともできず、「悲しみの祖先と子孫は、喜びの祖先と子孫よ

りもはるかに長くわたる」と感じているエイハブは、ブランド同様に悲しい人である(464)。エイハブの苦しみは、地球を回り、円環を構成しているピークオッド号とともにある。

一方、『白鯨』におけるクジラの群れは同心円を描いている。87章「大連合艦隊」(“The Grand Armada”)において、ピークオッド号は鯨の群れに出会い、スターバックとクエッグと他の乗船員は、ボートに乗り込み、クエッグは鯨に銜を打ち込むが、彼らはそのうちに鯨の群れの中心に滑り込む。下記の引用に示されているように、彼らは「同心円の外側の狂乱」をはるかに眺め、また次に8頭か10頭のクジラの繋がった群れ、「それぞれが、環になった無数の馬の群れのように、素早くぐるぐる回っている」のを見る。ピークオッド号の乗船員を取り囲んだ鯨の群れが作った領域は、幾重にも回転する外側の輪を含め、2、3平方マイルはある。

And still in the distracted distance we beheld the tumults of the outer concentric circles, and saw successive pods of whales, eight or ten in each, swiftly going round and round, like multiplied spans of horses in a ring; and so closely shoulder to shoulder, that a Titanic circus-rider might easily have overarched the middle ones, and so have gone round on their backs. Owing to the density of the crowd of reposing whales, more immediately surrounding the embayed axis of the herd, no possible chance of escape was at present afforded us. (387)

『白鯨』において、鯨は狂乱的な同心円を形成している。自然界のこの鯨の同心円は、エマーソンが指摘した自然界のスライディングを想起させる。もっとも、エマーソンの同心円のスライディングはわずかなものである。

『地獄篇』では罪人は地獄の円環から抜け出すことはできないが、スターバックと他の乗船員はようやく鯨の同心円から抜け出すことができる。スターバックはエイハブの目的とやり方に批判的で(109章)、特に123章「マスケット銃」(“The Musket”)においては「乗船員全員を殺しかねない」狂った老人、エイハブを撃つことさえ考えている(514)。それは、エイハブの白鯨への復讐心がチリングワー

スやディムズディルとは異なり、乗船員という海のコミュニティの命を危険にさらし、本来の目的である鯨油の獲得も犠牲にするからである。スターバックは、エイハブに反対するという役割を担っているために、鯨の「同心円」から抜け出すことができたのではないだろうか。もっとも、スターバックはエイハブの射殺を諦めた時点でエイハブに従うことになる。

もう一つ別の同心円のイメージは、物語の最後の場面、135章「追跡—三日目」(“The Chase - Third Day”)で見られる。ピークオッド号はモビィ・ディックに出会うが、追跡の3日目に攻撃を受け、沈没させられる。下記の引用にあるように、「同心円」を描く渦巻きがボートも乗船員もみな1つの渦に巻き込み、「ピークオッド号の小片」も渦となってぐるぐる回り、見えなくなる。ピークオッド号とエイハブはじめ海のコミュニティは、イシュメル一人を除き、「同心円」に飲み込まれる。『白鯨』における「同心円」のイメージの意味は破壊である。

And now, concentric circles seized the lone boat itself, and all its crew, and each floating oar, and every lance-pole, and spinning, animate and inanimate, all round and round in one vortex, carried the smallest chip of the Pequod out of sight. (572)

イシュメルだけがレイチェル号に救助され、一命を取り止める理由を考えてみる。最初、イシュメルはエイハブに共感し、モビィ・ディックに興味を抱いていた。しかし、イシュメルが描くフェデラと英国人船長とのやり取りから、イシュメルもエイハブにはもはや共感していないことがわかる。白鯨を追うことを諦めるよう忠告する英国人船長は、フェデラにエイハブ船長は「狂っているか」と尋ねると、フェデラは唇に指を当てたと描写されている(442)。この場面を描写するイシュメルはフェデラに共感していると考えられる。海のコミュニティにおいてイシュメルのみが生存する理由には、作品を成立させるために語り手のイシュメルを生存させる必要があることと、イシュメルがエイハブに共感していないことも挙げられる。モビィ・ディックのみに執着しているエイハブの人生は、エマソンが言う「自己進化の円」ではない。エイハブは発展・進化するどころか、

海のコミュニティの命をも破滅に導く。

メルヴィルの描く自然界の同心円は、エマーソンの同心円の概念と異なる。メルヴィルは1849年に初めてエマーソンの講演を聞いて感動し、本も読んだが、徐々にエマーソンの楽観的な自然観に批判的になっていった。⁵しかし、メルヴィルはエマーソンが論じた同心円を『白鯨』で使用した。エマーソンの同心円と異なる破壊的な同心円を描くことで、メルヴィルは自己の自然観を示したのである。メルヴィルが描く自然は、偉大であり、破壊力があり、恐怖さえも感じさせる。⁶

メルヴィルは1851年11月17日付けのホーソン宛ての手紙で、「あなたに本を理解していただき、今私は言葉にならないほど安堵しております。邪悪な本を書きましたが、子羊のようにけがれない気分です (I have written a wicked book, and feel spotless as the lamb.)」と書いている (*Correspondence* 212)。メルヴィルは『白鯨』を「邪悪な本」と認識しているが、自己の自然観を挿入することができたので「子羊のようにけがれない気分です」とホーソンに告げることができたのではないだろうか。

おわりに

メルヴィルは自分の捕鯨船での体験を生かして書いた『白鯨』に、ホーソンへの献辞を記して1851年に出版した。その時、ホーソンは出版者のエヴァート・ダイキンク (Evert Duyckinck) 宛ての1851年12月1日付けの手紙で、「メルヴィルは何という本を書いたのだろうか？ 以前のものより、より大きな力を与えてくれる」と書いている (*The Letters* 508)。ホーソンは自然との闘いを描いた『白鯨』のスケールの大きさを言っていると考えられる。白鯨はエイハブの前に大きく立ちはだかる自然であり、自然の同心円の破壊力を描くことでメルヴィルは自分の自然観を『白鯨』で表明した。また、『緋文字』と『白鯨』の男性登場人物、チリグワース、ディムズディル、それにエイハブはそれぞれの執着のあまり、地獄の円環から抜け出ることができずに亡くなる。エイハブのみが海のコミュニティを捲き込み、死へと導く。

一方、『緋文字』においてニューイングランドに戻り、社会貢献する新しい女性

のヘスターは、コミュニティに受け入れられてそこで共生を実現する。女性の登場人物、ヘスターは男性の登場人物にはできなかったことを成し遂げる。ヘスターが移動して形成した螺旋形はヘスターとコミュニティの発展を描き、アメリカの進むべき方向性を示している。

注

本稿は2019年2月20日、40th Annual Southwest Popular/American Culture Association Conference (Albuquerque, New Mexico) と2019年6月15日、日本アメリカ文学会中部支部例会にて口頭発表した内容を大幅に加筆修正したものである。

1. ダンテの『神曲』は、ホーソーンの友人ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) が、1867年に英語に翻訳してからアメリカではよく知られるようになった。それ以前は、原語 (イタリア語) で書かれたものか、ヘンリー・フランシス・ケーリー (Henry Francis Cary) が英語に翻訳したものが読まれていた。
2. 『地獄篇』第7歌では、欲張りの群と浪費家の群は、荷物を転がしながら逆方向に進み、ぶつかっては争い、再び同じ行為を繰り返す。欲張りや浪費は表裏をなす罪で、現世で貪欲だった彼らにはこの罰が果てしなく続く。また、第24歌では盗賊が毒蛇に咬まれ、火を発して燃え上がるが、全身灰と化すも、もとの姿に戻り、この罰が繰り返される。さらに、第28歌では生前に中傷をして分裂の種をまいた罪人は、身体を鬼に切り裂かれても傷口がふさがり、また同じ罰が繰り返される (Kurahashi 2-5)。
3. ホーソーンの「イーサン・ブランド」 ("Ethan Brand") における、すまから煙と炎が吹き出す石灰焼き窯の鉄の扉は、パニヤンの『天路歷程』において、羊飼いが巡礼者を案内する「愉快が岳」の中腹にある偽善者が通る地獄への脇道に似ている。
4. チリングワースには家庭を築き、父親になる願望があるためにパールに財産を残す。父親願望は、獄中で「薬はよく聞く、たとえ私の子供としても—そう、お前と私の子供だとしても—これ以上のことはできない」と、自ら赤ちゃんのパールを抱いて薬を飲ませるところに表れている (*The Scarlet Letter* 72)。
5. メルヴィルの1849年3月3日のダイキंक宛ての手紙には、エマーソンに賛同できない旨が述べられている (*Correspondence* 121-22)。

6. 杉浦銀策は、エマーソンの「オプティミズム」とメルヴィルの「ペシミズム」が対象をなしていることに関して次のように分析している（杉浦 89）。エマーソンは「西欧における思想文化の伝統を征服したかのような確信を抱いていたようである」。一方、メルヴィルは「巨鯨とそれによって象徴される自然や宇宙についての認識論的探求の旅は所詮徒勞に終わるしかない」と考えていた。さらに、エマーソンが「声」（講演）により、メルヴィルは「テキスト」によって自分の「思想感情」を伝えたことも対象的である。

参考文献

- Burt, Sandra. 'Circle Imagery in "Moby Dick" Used to Indicate Significant Philosophical Aspects of Book.' *Vassar Miscellany News*, vol. 42, no.16, 19 February 1958.
<https://newspaperarchives.vassar.edu/?a=d&d=miscellany19580219-01.2.20>.
- Emerson, Ralph Waldo. "Circles." *Essays: First Series. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson with a Biographical Introduction and Notes by Edward Waldo Emerson and a General Index*, vol. 2, 1903-04, pp. 299-322.
<https://quod.lib.umich.edu/e/emerson/browse.html>.
- Fogle, Richard Harter. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. U of Oklahoma P, 1978.
- Hawthorne, Nathaniel. "Ethan Brand: A Chapter from an Abortive Romance." *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat, et al., vol.11, Ohio State UP, 1974, pp. 82-102.
- . *The Letters, 1843-1853. The Centenary Edition*, edited by Thomas Woodson et al., vol. 16, Ohio State UP, 1985.
- . *The Scarlet Letter. The Centenary Edition*, edited by William Charvat, et al., vol. 1, Ohio State UP, 1971.
- Herbert, Walter T. *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family*. U of California P, 1993.
- Kehl, D. G. 'Hawthorne's "Vicious" Circles: The Sphere-Circle Imagery in the Four Major Novels.' *The Bulletin of the Rocky Mountain Modern Language Association*, Vol. 23, No. 1, 1969, pp. 9-20. JSTOR,
https://www.jstor.org/stable/1346577?seq=1#page_scan_tab_contents

Kurahashi, Yoko. 'Circular Images and the Community in "Ethan Brand" and *A Week on the Concord and Merrimack River*.' *Tokai Cultural Studies*, vol 4, 2019, pp. 1-11.

Longfellow, Henry Wadsworth, translator. *The Divine Comedy of Dante Alighieri*. The Project Gutenberg E-text, www.gutenberg.org/cache/epub/1004/004-images.html.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Idea in America*. Oxford UP, 1967.

Melville, Herman. *Correspondence*. Edited by Merrell R. Davis. Northwestern UP and the Newberry Library, 1993.

---. *Moby-Dick or the Whale*. Northwestern U, 1988.

杉浦銀策「メルヴィルとホーソン—「ホーソンとその『苔』」から『白鯨』まで」『サメとテキストーメルヴィルの世界—』大橋健三郎編 図書刊行会, 昭和58年.

平川裕弘訳『神曲』ダンテ著, 河出書房新書, 1995.

キーワード：円環、コミュニティ、共生、ピューリタン、同心円

倉橋 洋子（くらはし ようこ）東海学園大学 名誉教授